

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 307



1997 JUNE



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

HAJ 30周年記念行事資金協力をお願い

HAJは、1967年10月に創立され、緒先輩達の努力により本年、30周年を迎えることになりました。これを機会に記念の幾つかの行事を行うこととなりました。概要は下記のとおりであります。執行部としましては、これらの行事にかかる費用につきまして、極力外部資金の導入などを計って賄う予定であります。会員の皆様にも資金のご協力を仰ぎたくここにお願い申し上げます。

記

1. お願いする金額：一口 1万円
*機関誌「ヒマラヤ」誌上にて氏名・口数を公表します。(匿名を希望される方は、その旨ご連絡下さい。)
2. 記念行事の概要：
 - 1) 式典関係：
式典：1998年1月25日(日)(300名程度を予定)
午前：日本人ヒマラヤニストによるパネ

ルデスカッション

午後：ネパール、インド、パキスタン、中国から登山関係者を招請し、それぞれの国の登山環境の現状と問題点について講演をお願いする。

夜間：記念祝賀会

- 2) 出版関係：
 1. HAJ 30年間の行動記録： 500部
 2. ヒマラヤ日本隊のまとめ： 500部
 3. ヒマラヤ日本隊遭難事故事例集：1000部
 4. 機関誌「ヒマラヤ」総索引 200部
- 3) 野外関係：
それぞれのヒマラヤ諸国で行われる行事にあわせて臨時派遣。
- 4) 写真展：
会員からヒマラヤの「この一枚」を募集し、展示する。

表紙写真

ネパール、ダモダール・ヒマールのチュルー南東峰(旧東峰)6,400mの北東稜へと飛び出すと、左手にチュルー山群の主峰ともいべきチュルー東峰(旧西峰)6,584mを望む事が出来た。右手にゲンジャン(6,112m)、そしてその後方にはムスタン地方の赤茶けた荒涼とした大地が広がっていた。
(野沢井 歩)

ヒマラヤ No.307

1. 雲南最奥のカトリック教会を探ねて 中村 保
12. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・インフォメーション・トピックス・ヒマラヤから・Books〉
16. パキスタン登山隊1996年結果一覧表
18. ネパール登山の手引き(5)
21. ムスターグ・アタ登山計画
24. 寸感・事務局日誌

1996年10月

雲南最奥のカトリック教会を探ねて

—— メコンの谷を下る ——

中村 保

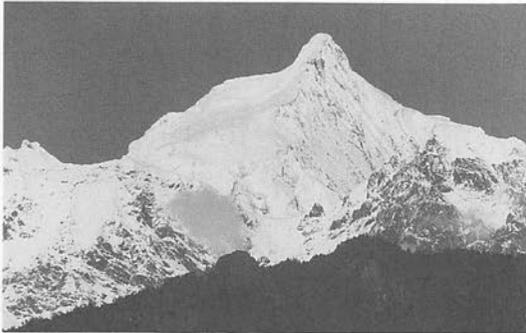
梅里雪山巡礼路一周の旅の後、一つの課題として、徳欽からの帰路をメコンの谷にとり、茨中^{ツチン}の教会を訪れ、できるなら信者からフランス・カトリック教会の宣教活動の歴史を聞き出す事を秘かに期待していた。メコンの谷を下る事にも大いに関心があった。徳欽からメコン川左岸沿いの道は小維西の少し下流から山側に入りリス族の邑、維西に至る。車で徳欽から8時間の行程である。

10月19日、快晴。雨期が完全に明けたようだ。一点の雲もなく秋空が澄みわたっている。展望台で心ゆくまで梅里雪山を写真に納めた後、維西に向かう。同行者は巡礼路の時のキャラバンの顔ぶれから梅里旅行社の阿登^{アテン}さん、運転手の格桑^{グサン}扎西^{ザシ}さんに変る。兩人ともチベット族、阿登さんは昆明の雲南大学で英語を勉強したインテリである。道は徳欽から白芒雪山の山腹に沿って約1000m下ってメコン川段丘の村、雲嶺^{ユンリン}からは左岸の川沿いを辿る。メコンの荒々しく豪壮な大峡谷は雪嶺あたりを境にして緑の谷に変わり、徐々に表情も穏やかになる。やがて河岸段丘に畠が広がり、とうもろこしの収穫に勤しむリス族の姿が現われる。キャラバンの出発点、羊^{ヤン}咄^{トウ}を通過、昼過ぎに車はメコンに架かる吊橋を渡って茨中に到着。遠くからでも教会のチャペル（礼拝所）が樹間に見える。実

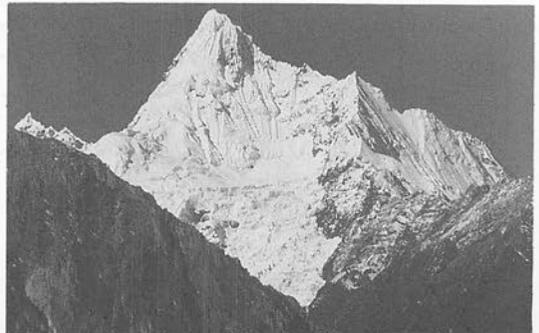
に立派な教会で、今でも近在のチベット族の信者のために使われている。雲南省の重要文化財の指定を受けて保護され、且つ、村の小学校にも利用されている。茨中は海拔約1900m、緑豊かな広葉樹と実り多い畠が目目を引く温帯的な風景の中にある村落である。

20世紀の初頭に東チベット南部に端を発して燎原の火の如く広がったラマ教徒によるキリスト教伝導所焼打ち事件の舞台の1つがこの茨中であつた。百年を経た今日の状況を自分で確かめてみたい、という欲求に駆られて旅のスケジュールに織り込んだわけである。教会をひとわり見た後、茨中の歴史を知っている信者の長老を探してもらいインタビューをする事にした。長老の話の前に、この焼打ち事件の前後にこの地を訪れたヨーロッパ人やアメリカ人の体験と観察を通じて時代背景と、何が現実^{トシケン}に起つたのかを振り返ってみよう。

先ず、1895年、インドシナ^{トンキン}の東京（現在のベトナムのハノイ）から雲南を経由してビルマ北部を通過してインドのアッサムに至ったフランスのアンリ・ドルレアン公の旅が、私の知る一番古い記録である。サルウィン川、メコン川上流域への宣教活動はインドシナから雲南の權益獲得を目論んでいたフランスが最も活発で、1860年代にはフレン

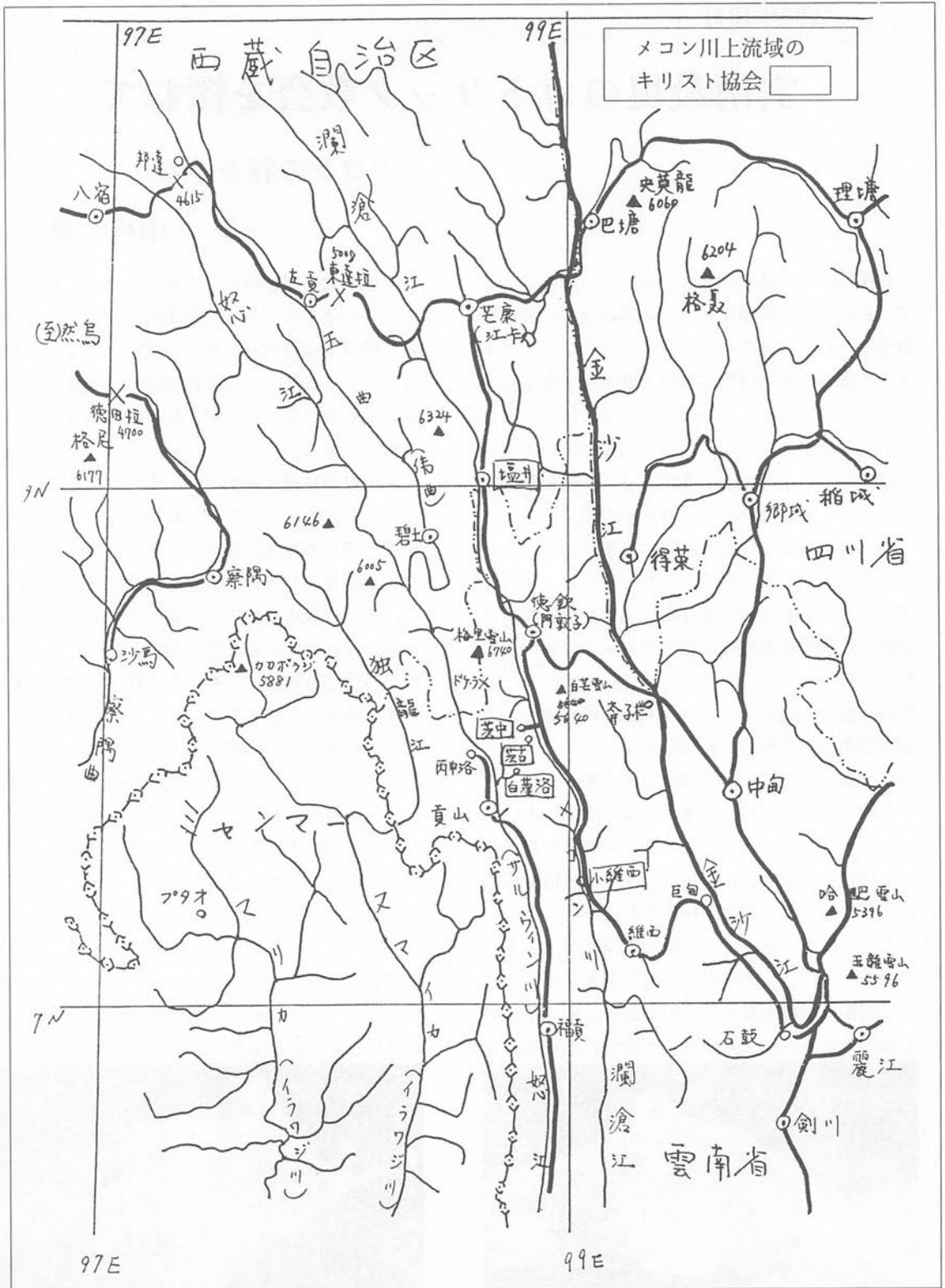


▲主峰、カ格博（カウグボ）6740m



▲面茨姆（メンジボ）6054m

徳欽からメコン川沿いに南に下ると、梅里雪山の雪峰の姿も変わってくる。



チ・ローマン・カトリック教会がサルウィン川流域に伝導所を数ヶ所作り、やがてメコン川流域に進出する。ドルレアン公はボンバロとのチベット

探検行の後、メコン川からイラワジ川の源流部を通してインドに抜ける探査行を企て、1895年1月から翌年の1月にかけて敢行する。その途上で

茨古 (Tsekou : 自古とも書く) に逗留し、茨古を基地にして阿敦子 (徳欽) に調査グループを派遣した。茨古は茨中から数km離れた村で、焼打ち事件の以前は伝導所は茨古にあった。ドルレアン公は8月から9月にかけて3週間茨古に滞在している。その時の様子を『Tonkin to India, by The Sources of The Irawadi, January '95-January '96』 Prince Henri D'orleans からピックアップする。

ドルレアン公一行はメコン川のロープブリッジを渡り、茨古で2人のフランス人神父に迎えられる。1人はソーリエ (Soulie') 神父、もう1人がデュベルナル (Dubernard) 神父で、既に28年間もこの地で布教に携わっていた。この間、白人に会ったのは英国人、クーパーのみである。デュベルナル神父は広く尊敬をうけ、9千人もの住民に種痘を施し、古代キリスト教共産主義的な善政を行い名声を博していた。白壁の伝導所の建物について正確な記述をドルレアン公は残している。二階建て屋根は中国風、テラスがあり、神父自慢の礼拝堂 (チャペル) は中国式設計の三層の構造で切妻屋根、木の格子細工が施されている。高さは65フィート。建設に3年を要した。この茨古の伝導所は、焼打ち後に茨中に再建された現在の教会とそっくりである。

当時のこの地区の人口構成はモーソー (納西族)、リス、ルツ (怒族)、チベット、漢及び混血だったようだが、現在はチベット族と納西族がマジョリティーでもある。キリスト教徒の職業は主として農業、牧畜 (牛)、狩猟、家内工芸であった。ヤクや牛の乳からバター、チーズを造り、木の皮から紙を造った。木彫の器も造った。リス族は狩猟に長け、また崖に作られる蜂の巣から蜂蜜を採取し山地の大事な食料の1つとした。理解ににくい事だが、家庭内での喧嘩が原因で起る自殺は一般的な出来事だったという。キリスト教と自殺は結びつかないが、少数民族の特性に起因する部分があるのだろうか。1992年の正月に四川省の金沙江のほとりのイ族の街、雷波に行った時、夜中イ族の青年が家の中での採め事から崖に身を投げて死んだという話を聞いたことを思い出した。

★

19世紀末のこの辺境の地の政情は極めて不安定であった。清朝政府の北京からの勅令はメコン川流域では無視され続けた。「地方の領主の妨害無しに、宣教師が交渉によって家屋と土地を取得する事を是認する」という天津条約の条項を、清朝政府は1894年に再公布したが、維西の地方当局はこの事実を容認する事を拒絶した。阿敦子の伝導所の再建も認められていなかった。厳しい状況の中で宣教活動の困難さは想像に余りある。

ドルレアン公が訪れた10年後に、今度はチベット人ラマ教徒による焼打ち事件に発展する。この時、著名な植物学者、ジョージ・フォレストが茨古に居合わせて事件に遭遇している。中国における植物採集について書いたコックスの本『Plant-Hunting in China』 E.H.M.Coxから関係のある部分を引用する。

「1905年の春、ソーリエは赤帽派のラマ僧から中国・チベットの抗争が激化すると警告された。彼は急いで蒐集した品物をまとめ、安全な所に避難しようとしたが間に合わず、巴塘のチベット僧に捕えられ、15日間の拷問の後銃殺された。輝かしい植物採集家の悲劇である。チベットとの国境上のヤレゴン (Yaregong) は中国・チベット問題の温床であり、常に危険を孕んだ場所であった。ソーリエの協力者のボードネック (Bourdonnet) もソーリエが殺害された僅か数ヶ月後に毒矢で傷つけられ、首を刎ねられた。ソーリエの後継者、モンベイク (Monbeig) もまた1914年に殺害された。」

「中国とチベットの間の問題と争いは、1904年のヤングハズバンド大佐のラサ侵攻によってラマ教徒の世界を混乱に陥し入れた英国との問題も新たに作用して、1905年の春から初夏にかけて広がっていった。その時、ジョージ・フォレストは北緯28度、メコン川西岸の茨古近くで採集をしていた。最年長のフランス人宣教師、ペレ・デュベルナルがフォレストの活動を助けていた。一方、ヤレゴンから逃げてきたペレ・ボードネックも合流した。そして、彼等はすぐ脱出を企てた。フォレストは運良く逃げ延びたが、デュベルナルとボードネックの2人は殺されてしまった。デュベルナルは花に興味を持ち、フォレストをサポートし、且つ、パリの植物標本館のために植物の採集も行っ

た。プリムラ（サクラ草科の植物）、デュベルナールディアナ（*Primula Dubernardiana*）は彼に因んで名付けられた。」

「フォレストは1905年の末に茨古に戻ってきた時、すんでのところまで命を落とすところだった。巴塘の北方で反乱を起こしたチベット人のラマ僧達は、巴塘にいる中国人や宣教師を殺し、更に阿敦子（アトシ）に向けて行進した。そこから彼等は茨古を攻撃し、逃げようとする宣教師を殺害した。運の良い事に、フォレストは森に駆け込み、9日間隠れてチベット人の追跡から逃がれた。その後、友好的なリス族の村に辿り着いた。結果、採集した植物標本を全て失ってしまった。」

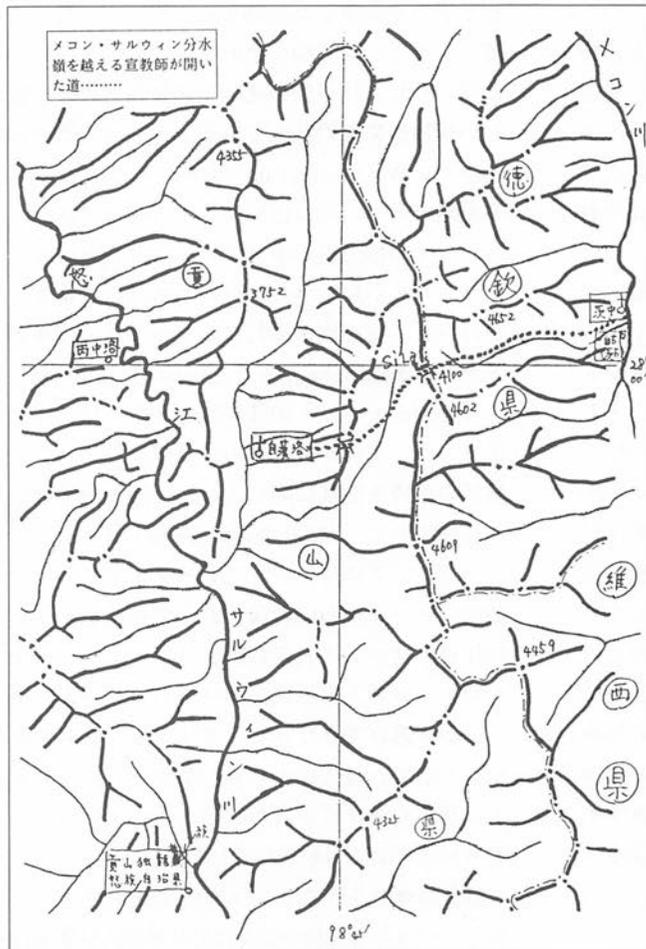
大変困難な時代背景であった。能海寛は1901年4月18日に南條文雄に最後の手紙を出して、大理府を出発しチベットに向かい、以後音信を絶った。能海は麗江、中甸、阿敦子（徳欽）、江卡（芒康）を経てラサを目標したが、消息は杳として分から

ない。徒手空拳の一日本人学僧にとって、当時の金沙江とメコン川にまたがる中国・チベット国境地帯は危険すぎる土地であった事は、宣教師達に襲いかかった運命から容易に察知されよう。

そして1911年、K・ウォードも茨古を訪れている。『青いケシの国』の「メコン谷を溯って」の章から引用する。

「1905年以前にはツ・コウ（茨古）にカトリックの教会が建てられていたが、シナ人に反抗して立ち上った巴塘以南の国境地帯のチベット人たちによって焼打ちされ略奪された後、いまはもっと重要な村になっているツ・チュン（茨中）に再建された。ツ・チュンには30人ばかりのシナ人の兵隊のほか、約20世帯の人々が住んでいる。災難に遭って命を落とした2人のフランス人の墓も建てられていた。」

「（ツ・チュンに住む）2人の名はモンベイク神父とルスゲルグス神父。モンベイク神父は1905



年の反乱を生き延びてきた人だったが、追手をのがれて逃げ込んだ山奥から彼の家の教会が燃えるのを眺めていたという事だった。それ以後は山の中やサルウィン谷のルツ族やリス族の中に紛れ込んで半分飢えながら彷徨った末、最後に南方に逃げたそうである。」茨中の新しい教会は焼打ち事件の清朝政府がフランスに支払うべき賠償金で再建された。そして11年後の1922年の秋、ウォードは念願のサルウィン・イラワジ分水嶺を越えビルマ入りを果たす。その途上、西へ向う山脈横断の旅の準備のため茨中に3日間滞在し、フランス伝導所のペレ・オブラー神父（Pere' Ouvrard）の歓待を受ける。その時の紀行『支那からカムティロン』（1922～1923年）の中で茨中での布教活動に触れている。カムティロンとは、ミャンマー（ビルマ）北部の現在のブタオ地方、かつての英国によるビルマ植民地化の前進基地になった土地である。余談だが、この本は、金子民雄氏が指摘している通り、数多いウォードの著作の中で『青いケシの国』とともに最も優れていると思う。横断山脈と深いゴルジュの国について語るには

上記の2作に加えて、ウォードの『チベットの謎の河』、『ビルマの氷の山』と『チベットの植物採集家』の3作は必読の著書であろう。『青いケシの国』以外は、まだ翻訳されていない。

★

一流のヒマラヤニストの日本百名山の早登りのパフォーマンスがNHKテレビでもてはやされ、また、ヒマラヤ8千m峰のガイド登山の時代になった。日本にとって関心の薄い土地であろうが、古典的な探検記など、職業的な旅行家や辺地を映像で紹介しているメディアの専門家にとっても、手間や暇をかけて繙くほどの価値や効用は無くなってしまい、出版社は売れない本には見向きもしない。未だに、中国辺境、ミャンマー北部やアッサムの奥地にわけ入り、それぞれの人生を实践した欧米探検家や旅行家のノンフィクションの世界に楽しみを見出している選歴を過ぎた元クライマーにとっては淋しい限りである。

少々脱線してしまった。話の筋を元に戻そう。1922年10月9日、ウォードは茨中に着いた。そこでウォードが体験したことを『支那からカムティ・ロン』で書き残してる。そのうちの2つについて要約する。

1905年の焼打ち事件の時生き残ったモンベイグ神父も1914年に打箭炉に行く途中で殺害された。が、1922年当時の茨中のオブラー神父は数百人の改宗した信者にとって、牧師という宗教上の司祭であるだけでなく、医者でもあり法律家でもある全能の存在となっている。腸チフス、天然痘、ライ病や外界から侵入してきたインフルエンザが蔓延している土地で、神父は献身的に医療を施した。改宗者は一部納西族もいるが大部分はチベット族であり、ラサの指令を受けて支配するラマ僧侶には従おうとしない。彼等自給自足の社会にとっては、永久に抑圧と搾取を続けるラサのチベット政府による桎梏しつこくに堪えるよりは、何もしてはくれないが干渉もしない中国の雲南府の保護の下にいる方が居心地が良いと考えたのだらうと、ウォードは記している。

「フレンチ・カトリックの宣教師とプロテスタントの宣教師の違いについて感銘を受ける。……」ウォードは1911年の旅の印象では、カトリックの

▼メコン川の峡谷（徳欽の少し下流）



活動に関して、地理的探査の分野を評価しているが、宣教的な面では成果を認めていなかった。しかし、1922年の茨中滞在で認識を改めている。プロテスタントとの比較が興味深い。フランス人宣教師は土地の人々と密着して同じ生活様式で暮している。伝導所は「御伽の家おとぎ」のように誰でも自由に出入りができ、オブラー神父は常に信者にとって近づきやすい存在である。食事をとる時でも神父は家を信者にオープンにしている。一方、英国のプロテスタント宣教師は食事の時はプライバシーを守った。この地方ではカトリックがプロテスタントよりずっと成功した。改宗者はカトリックの方が10倍も多かった。より深く観察して見ると、カトリックの浸透は教化の内容や方法の違いによるものではない。プロテスタントの宣教師の殆どが「ごろつき」や「喰いつめ者」だったのに対し、カトリックの神父には使命感が強く信頼に足る有能な人材になったためである。」とウォードは指摘している。

1922年7月、ウォードの5ヶ月前に英国人地質学者のグレゴリー父子がビルマから雲南省に入り、麗江、維西を経てメコンの谷を溯り、メコン・サルウィン分水嶺を越えている。茨中でロープ・ブリッジを渡り、シ・ラを越えて白漢洛に行き、ロンドレに通じる峠を通して再びメコンに戻った。彼等の紀行『支那チベットのアルプスへ』(To The Alps of Chinese Tibet)の中でフレンチ・カトリックの進出の歴史と使命感について他の著書より若干詳しく書かれているので要約する。

(1)茨古の伝導所創立は1866年に遡る。1865年に白漢洛の北、サルウィン川畔のキオナトン(Kio-

▼茨中のカトリック教会（正面）



natong) 村の伝導所が支那人の扇動により焼打ちされた時、運よく逃げのびる事ができたM・ビエト (M. Biet) が茨古をベースに宣教活動を再開した。が、彼の同僚のM・デュランは逃走の際、ロープ・ブリッジを切断されて殺された。

(2)1868年に辺境探査の先駆者、T・Tクーパー (Cooper) は茨古でビエト、デュベルナル両神父のもてなしを受けている。そのクーパーの言葉は重い。「茨古の伝導所の歴史は、創立以来、信仰のため毒矢や山刃に倒れた多くの勇気ある高潔な宣教師の血で贖あがなわれている。帰国する希望を捨て、自ら求めてこの地にやってきたフランス人宣教師達は、弛むことなく宣教活動を続けてきた。清朝政府の執念深い敵意に扇動された野蛮人による虐殺に遭いながらも、時に山奥に逃げこみ布教を行い、数百の純粋な改宗者によって彼等の献身的行為は報われた。」(『Travels of a Pioneer of Commerce, 1871』より)

(3)チベット人の反乱の時、1905年の虐殺が起った。ラマ僧達は破壊を繰返し南下、特に宣教師を皆殺しにしようとした。茨古に着くなり全ての退

路を断ち、多くの信者と2人の神父を殺害した。が、フランス伝導所は長く放置される事はなかった。死屍を乗り越えて殉教を厭わない聖職者がやって来た。ペレ・オブラー神父が来てすぐ、伝導所は茨古にではなく北に数マイル離れた茨中に再建された。以前の伝導所の伝統ののっとり、宗教的儀式が再開された。フランス人宣教師の孤立無援の活動に対して、フランス政府は必ずしも全面的にバックアップしていた訳ではない。都合によっては存在を否認することもあったという。

★

1世紀前の状況を振り返ってみてきたが、現在はどう変っているだろうか。百年近くたっている教会は、中国革命、新中国成立、そして文化大革命の時代の荒波を経ても、比較的よく手入れされた落ち着いたたたずまいを見せている。信者の長老の話をお聞き。

中村「茨中の教会の歴史についてお話を聞かせて下さい。」

長老「私は60歳、チベット族半分漢族半分の信者です。知っている限りお答えします。」

中村「まず歴史についてお願いします。」

長老「長い歴史があります。約150年ぐらい前から外国人宣教師が入り始めました。この地方へは、始めはミャンマーからツァワロンに入り、そこからメコン流域に入ってきました。まず茨古に小さな伝導所を作りました。しかし、チベット族のラマ教徒はそれを許しませんでした。すぐ外国人を追い出し、教会も焼打ちしました。」

中村「教会焼打ち事件は1905年の事と本で読みましたが。」

長老「私は詳しい年月のことは分かりませんが、その時、ラマ教徒は茨古の教会を破壊しました。宣教師は脱出したが、維西の南の山中で追いつかれ、外国人は全員ラマ教徒によって殺されました。しかし、1人の信者がうまく逃げおせて、怒江にある伝導所の宣教師に通報しました。状況を聞いたフランス人宣教師が昆明に急行し、雲南府に報告し、対策を要請した結果、雲南府は出兵しラマ教徒と交戦しました。ラマ寺は壊され、多くのラマ教

徒も殺され、清朝政府軍は勝利を収めました。そして、少し離れたここ（茨中）に教会は再建されました。」

中村「私の知る限り、ここはフランスのカトリック教会と聞いていますが。」

長老「我々はフランスの天主教と言っています。それ以上のことは分かりません。」

中村「信者の中で各民族の分布はどうですか。」

長老「この辺の住人はチベット族、次に納西族です。従って信者も同様にチベット人が最も多いです。茨中の教会のある村の80%はキリスト教の信者です。茨中の村は約百戸、総人口は7百～8百人ぐらいです。以前教会のあった茨古の村は100%が信者で、総人口は千人ぐらいです。周辺の村々も加えると現在の教会の信者は2千数百人程度です。」

中村「日常の活動はどうでしょうか。また牧師さんは居ますか。」

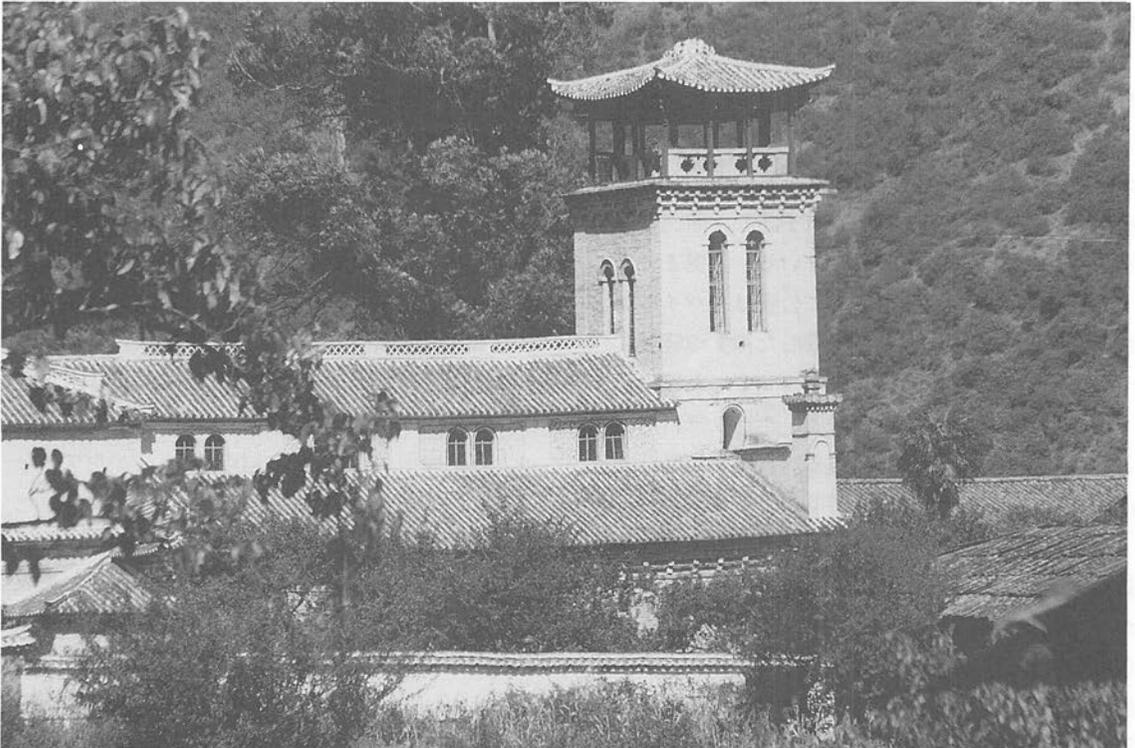
長老「日曜日のミサに普通は百人ぐらい来ます。祝祭の時、例えば12月のクリスマスには千人ぐらい集ってきます。神父さんはいるが、現在は小維西に住んでいて、時々巡回してきま

す。今年90歳ぐらいになると思います。」

長老の話と約百年前の記録を比べてみると、多少のずれはあっても長老の理解と認識は可成りしっかりしている事が窺える。

★

茨中の教会を辞してメコン川の左岸を下る。天気は快晴、崩れる兆候は全くない。メコン川はだんだん大きくなり、大河の様相を見せ始める。緩い流れの部分と急流が交互に現われるが、上流の峡谷的な趣きはなくなる。両岸に水田と畑が広がる、かと思うと、開けた段丘は再び狭まり急流となる。変化にあきない。道は徳欽県から維西リス族自治県に入る。埃りっぽくなる。午後5時、立派な道路橋の架かる村を過ぎる。リス族が好む赤い花の蕎麦畑を写真に撮ろうとしたが、2週間ほど遅かったようだ。メコン峡谷の乾燥したチベット族の土地から数時間で多くの少数民族が住む土地に移り変わる。チベット族、リス族、納西族、怒族、白族、プミ族が共存する土地に変わる。やがて小維西に着く。現在の交通地図にその地名は載っていないが、古くからある村で、伝導所もある。茨中で聞いた神父に会うために車を止める。運よ



▲茨中のカトリック教会

く車に寄ってきた子供に訪ねたところ、自分は神父の孫だという。早速母親を呼んでもらい神父の消息を聞く。

中村「神父さんに是非会いたい。」

母親「今、神父さんは留守です。チベット自治区側の塩井の教会に出掛けています。」

中村「残念です。次回来た時には会って話を聞きたい、神父さんの名前を書いて下さい。」

母親「^{スーグワンゴン}施光栄です。もともとこの土地の人でしたがイギリス人について勉強をしました。茨中、塩井、小維西のメコン川沿いの教会や怒江の^{バイハンルー}白漢洛の教会の神父をしています。3人のイギリス人が小維西に来て施神父に会いました。今も教会に滞在しています。神父の歳は80歳台ですが正確には分かりません。」

この母親は神父の実の娘とも思えなかったが追求はしなかった。小維西に居るという3人のイギリス人に会って話を聞き、情報交換をしたかったが、麗江・昆明・香港の航空便の予約ができていたので時間的余裕がなかった。南西中国辺境のキリスト教の歴史や今日の活動状況、そしてヨーロッパ人のかかわりを知る機会を逸した事は、改めて残念なことをしたと悔まれる。

私の老神父への拘りにはそれなりの理由があった。私もメンバーの1人である雲南・西藏民俗研究会を主宰している盛田武士さんとの縁である。盛田さんは1996年4月末に怒江流域の貢山から白漢洛に入りカトリックの伝導所を訪れ、前述の施光栄神父に会って^{つがき}具に取材している。山奥まで来て熱心に調べていた盛田さんに公安はスパイの嫌疑をかけたという。現場で聴取した神父の経歴について、盛田さんのメモを引用させていただく。

「白漢洛は中国雲南省の最奥、チベット自治区とほぼ境を接するところにある。貢山から怒江支流を北東に遡り徒歩で約6時間のところ。チベット族百戸、3百人が住む。19世紀末にカトリック教会が建設されたが、1905年の事件で神父、信者がラマ教徒に殺害された。現在の神父は施光栄(78歳)、1987に初めてこの地に来る。維西、貢山、徳欽等を管轄、^{ビンチョンルー}丙中洛を含め信者は約4千名。1995年には双拉村にも教会が建設された。施光栄神父は1945年昆明の神学院に入学、1950年に卒業

(但し、1949年の新中国設立後は宗教活動は認められなくなる)。1962年から20年間刑務所に収監され、1982年に出所、名誉を回復した。その後、上海の教会で神品を受け正式に神父となる。」

★

白漢洛へは小維西からメコン・サルウィン(怒江)分水嶺、怒山山系の山道を強行軍をすれば歩いて1日で行ける、と土地の人は言う。白漢洛の位置と茨中を貢山県22万分の1の地図で追ってみると、分水嶺を挟んでいるが直線距離は短い。カトリックの2つの重要な伝導所を結ぶ道は宣教師によって19世紀末に開かれている。怒族を工夫に使い5年かけて造られた。4100mの峠、シ・ラ(Si-la)で分水嶺を越え、更にもう1つ峠を越えて2～3日の行程である。この往時からのルートは前述の小維西からの道とは異なる。

1922年、ウォードは10月12日に茨中を発ってビルマへの壮途につく。13日、シ・ラを越える。シ・ラ付近の水喰地形の景観や遙か西の、ウォードが長年、憧れを抱いていたサルウィン・イラワジ分水嶺を、思いを込めて『支那からカムティ・ロン』の中で詳しく描いている。14日、白漢洛着。当時、白漢洛はルツ族(怒族)の村でチベット語でバハン(Bahang)と呼ばれていた。白漢洛は漢族の呼び名で、ウォードはペハロ(Pehalo)と書いている。ウォードの記述をまとめてみよう。村は約20戸、家々は谷をはさんで離れて散在している。急斜面を耕作する事と水利の配分のためである。谷はモンスーンの豪雨によって山腹が抉られ深い割れ目を造り、亜熱帯性の樹林や竹藪が濃く繁茂して居る。家屋は屋根の上の不安定な狭い所に建てられ、周囲は公園のように草地とまばらな木立が目につく。カトリック伝導所は溪谷の流れから500m上方の屋根の上に建てられている。サルウィン川よりは約1000m高く快適である。ここでウォードは新任の神父、ペレ・アンドレ(Pere' Andre)に歓迎され、カムティ・ロンへのキャラバン編成に協力してもらおう。が、残念な事にウォードは伝導所の歴史や状況には触れていない。

1923年10月、ジョセフ・ロック(Josef F. Rock)がメコンとサルウィンの探査に訪れた。ウォードの丁度1年後、A・Dニールの1～2ヶ月前で

ある。ロックはアメリカの探検家でアムネマチンやミニヤ・コンカの探査をし、後年は麗江に腰を据えて納西族の東巴文化の研究に没頭した。横断山脈を舞台に踏査した先蹤者としてロックはウォードと共に双壁であろう。そのロックも深いゴルジュの国を目指した。米国のナショナル・ジオグラフィック、1926年8月号の『アジアの大河の峡谷』で梅里雪山からサルウィン・イラワジ分水嶺まで、多くの写真と要領よくまとめた文章で紹介し、その中で布教活動についてもふれている。ロックは1923年10月上旬に麗江を出発して石鼓から揚子江沿いに北上、巨甸から揚子江・メコン分水嶺を越え維西を経てメコン川の左岸をたどる道を選んだ。茨中の伝導所でオブラー神父から一部屋の提供を受け、サルウィン川への旅の準備をする。茨中に至る途中の村、イエチェでロックが聞いた話はフォクスの記述を補足する逸話として面白い。即ち「1905年に植物探検家のジョージ・フォレストを救ったのは、この一帯を支配していた納西族の領主、リーである。リーは外国人には親切で、ここを通過する外国人旅行者は皆リーを頼って訪れた。メコンの谷の神父を皆殺しにしたチベット人ラマ僧達によって、フォレストは数日間にわたって山狩りをされた。もしラマ僧がフォレストを捕えていたら、フォレストもデュベルナル神父がされたと同じように、生首が阿敦子のラマ僧院の門を飾ったことであろう。」と。ロックはウォードと同じルートを通り白漢洛に至り、更にサルウィン川に下った。ロックは白漢洛の伝導所を「キリスト教の前進基地」と位置づけている。ウォードとは違った目線でもらえた白漢洛の当時の状況を、少し長くなるが引用したい。

「美しい針葉樹の森を下ってドヨンロンバの深い谷へ下ると、切り立った斜面の標高2500mの所にあるチベット語でバハン (Bahang)、中国語でペハンロー (Pehanlo) と呼ぶ村にキリスト教伝導所の最前進基地があった。私が知る限り最も美しい伝導所である。若いアンドレ神父が1人で住んでいる。彼は第一次大戦に従軍し最後まで闘った。今はこの避遠の地で戦争の無益さを反省していると言う。11月から5月まで峠は雪で通れなくなるので、彼は外界から完全に孤立する。その間、

手紙も届かない。ここから北に2日行けば禁断の地、チベットであり、南に2日下れば反抗的な黒リスの土地である。バハンには丘の周りに18戸の家がある。丘の上に教会と伝導所が建っているが、2つともチャンプトン (Champutong) のチベット人ラマ僧によって2回焼かれた。2回とも、現在サルウィン川のジョナトン (Jonatong) に住んでいる勇敢なジェネスティエル神父は命からがら逃げのびて、南の方のリス族の家に隠れた。彼は1905年の殺戮事件の唯一の生き残りである。サルウィン川のこの一帯にはルツ族 (怒族) が住んでおり、アンドレ神父はルツ族の精神面での良き助言者である。ルツ族はとうもろこしだけを主食として生きている。とうもろこしから酒を造り、よく飲む。アンドレ神父には本当に歓待された。彼の菜園や食料庫を勝手に使わせてもらった。別れをつけて彼を原始的なルツ族に囲まれ、厳しい冬と苦闘せねばならない世界に1人残して出発するのはつらいことであった。」

ロックはサルウィン川のチャンプトン (現在の丙中洛) まで行き、私にとっては「雲南最奥の幻の雪峰、ケ・ニ・チュンプ」を写真に収めている。この山については別に書きたいと思う。ロックはメコンに戻った後、11月に入ると羊咄を出発し、当時でも年間に2万人も来るといふ巡礼とともに聖山ドケ・ラを越え、梅里雪山、面茨姆峰のツェワロン側の写真を撮るためサルウィン川への12日間の旅をしている。その途上、巡礼を観察し、ドケ・ラから多くの巡礼が投身自殺をするという意外な事実を書いている。この聖なる場所で死ぬことは輪廻の束縛から解放されるから、とロックは解釈している。氷と雪の峠と岩の道を五体投地で行く巡礼の姿もロックは詳しく表現している。ロックは11月30日に阿敦子を発って、白芒山峠の別のルートを通る帰途についた。その1ヶ月後、チベット人の乞食姿に変装しラサを目指してドケ・ラを越えたフランスの女性探検家、A・D・ニールのことに触れておこう。その時の紀行『ラサへの旅』(My Journey to Lhasa) の中で、羊咄付近のロンドレで「あるアメリカ人のナチュラルリスト」とのニア・ミスを書いている。1ヶ月ずれたらロックとニールは邂逅していただろう。ニールもまた

茨中の伝導所で世話になっている。『ラサへの旅』の第1章の冒頭で「さよなら……我々（ニールと供の蒙古人ラマ僧）は出発する。道の曲り角でもう一度振り返る。外国人宣教師が見送ってくれる。我々の冒険が始まった。」

1923年の末にロックとニールが訪れて以降宣教師を除いては、1993年に米国人登山家のN・B・クリンチ氏が入域するまで、サルウィン川の深い峡谷地帯は70年間外国人には閉ざされた世界となった。

梅里雪山一周の巡礼行でツァワロン地方を通り、メコン谷の茨中、小維西を訪れ、山と歴史の旅の内容がさらに豊かになった。また盛田さんの情報を得て、雲南・四川・チベットの接点にあたる深い浸食の土地での宣教活動の苦難の歴史と今日の姿が、まだ点と点を結びつける程度だが、その一端が見えてきたと言えよう。今後掘り下げてゆくテーマとして面白いと思う。

★

夕闇が迫る頃、雪嶺からメコン川の左岸を辿ってきた道は海拔1700m地点の大きな村のある所から支流沿いに維西に上る。インテリの阿登さんが

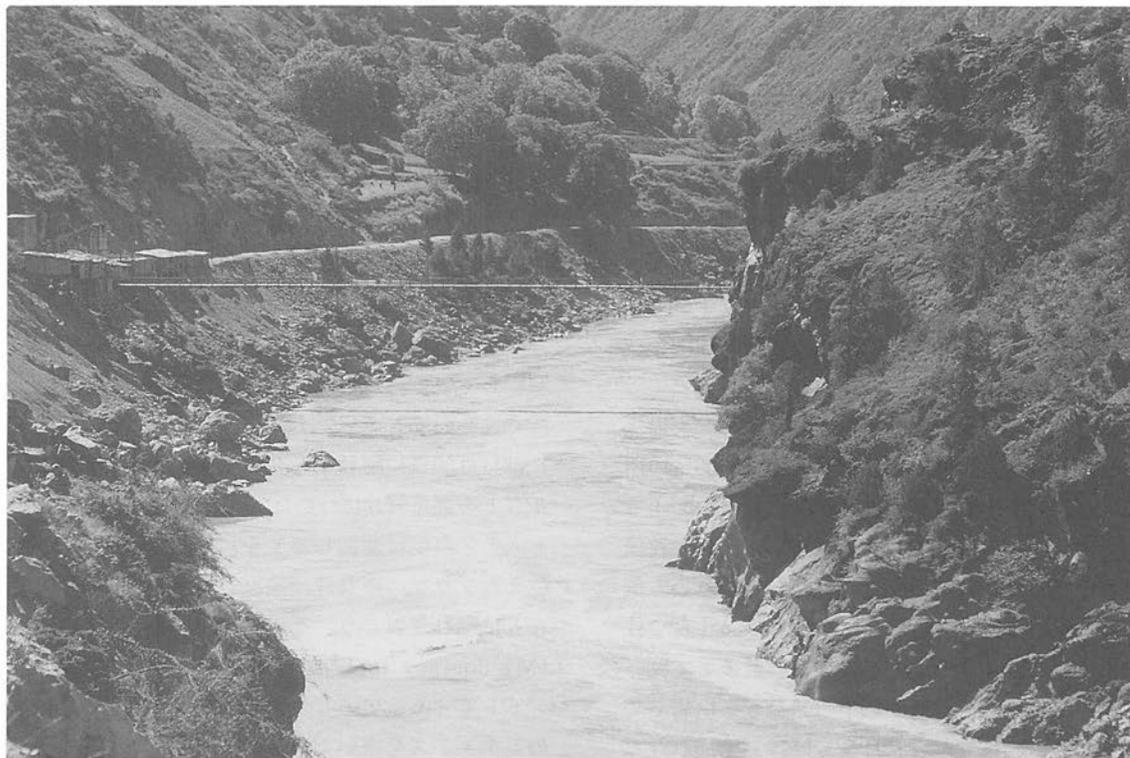
いろいろ話をしてくれる。先ずは、このあたりに住んでいる少数民族の中でもマイノリティーのプミ族の事。もともとプミ族はチベット族の分派だが、カンバ（東チベット・カム地方のチベット族）から少し離れた場所に住んでいるため、中国政府が民族調査をした時、住人が自分達の事を「プミ」と言ったので、あたかもプミという独立した少数民族が存在するものとして分類されてしまい今日に至っている。プミはカンバ同様チベット族の範疇に入れられるべきである、と言うのが阿登さんの見解である。知的な話題から下世話な事へも会話がはずんだ。幾つか書いてみよう。

中村「チベットの諺で面白いのを1つ披露して下さい。」

阿登「“友達の服は着ることができが、友達の馬に乗せてもらうことはできない” ここでいう馬は奥さんのことです。別の女性とは遊べても友達の奥さんに手を出してはいけないという意味です。」

中村「さっき歌ってくれたカワグボ（梅里雪山）の歌詩を翻訳して下さい。」

阿登「“カワグボの山は1番高い、



▲メコン川、巡礼路は吊橋を渡って聖山ドケ・ラに向う。（下るに従い、荒々しさが少くなる）

遠く離れても山の頂が見える、
カワグボの頂を見ると故郷を思い出す、
遠いところから両親と故郷の幸せを祈り
ます”という歌詩です。」

中村「なかなか良い文句ですね。巡礼の皆さんの
気持ちが伝わります。ところで話題を変えます。
徳欽県におけるチベット語教育について
解説して下さい。」

阿登「徳欽県の一般の小学校、中学校では、かっ
てはチベット語を教えていたが、国の試験で
はチベット語を使わないためチベット語を覚
えても役に立たない。そのためチベット語教
科は無くなってしまったので教えていません。
しかし、現在、徳欽の民俗小学校、民族中学
校では漢語の他にチベット語、チベット文化
を教えています。」

中村「阿登さん、扎西さんのチベット語はどのレ
ベルですか。」

阿登「会話はできますが、読み書きはできません。
我々2人はチベット語に関しては文盲です。
とくに扎西さんはチベット語より納西族の娘
さんに興味があります。納西族の娘さんのほ
うが開放的で、そんなところを揶揄する諺が
あるくらいです。扎西さんは運転手なので、
自分が行く先々の主な町にはちゃんとコネを
つけてあります。明日も麗江で納西族の娘さ
んが扎西さんを待っているでしょう。」

中村「扎西さんが性病の配達人にならないことを
祈ります。確かに私が受けた印象でも、納西
族の娘さんはふっくらして穏やかで親しみや
すい感じがします。結構美人も多く見うけま
す。徳欽県の前県長、^{フリチン}比里取扎さんの奥さん
は納西族で大変しっかり者です。チベット族
の男と納西族の女は相性が良いのでしょう。
^{カワグボ}卡核博のお后妃の^{キサキサミアンツム}面茨娑娑峰は納西族ですから。

メコン川流域の塩井あたりまで、チベット
族と納西族がモザイク状に住み分けています。
チベット族は納西族をどう評価していますか。
阿登さんの個人的な見方を話して下さい。」

阿登「歴史、文化は対等で、同じような水準にあ
るでしょう。しかし、納西族の人達は友達に
なりにくいと思います。チベット人なら何か

良いことをしてくれた相手には必ず恩返しを
するが、納西族の人達はそういう感覚を持ち
合わせていません。そんな訳で、昔からチベッ
ト族と納西族は仲が良いとは言えません。」

阿登さんの納西族に関する考察には客観性があ
るのかどうか分からないが、私の体験とは異なる。
麗江で日本向けの^{カワグボ}山葵栽培に取り組んでいる納西族
のエリート、揚静全氏が語ってくれた進取的で開
明的な納西族像と揚氏の古人の信頼に足る性格は
阿登さんの見方にそぐわない。

夜8時すぎに維西着。私にとって2回目の滞在
である。中国辺境の町の招待所やホテルの夕食時
間は早い。ホテルの食堂はサービスが終わってい
るので街へ出て、ようやく1軒だけ開いている飯屋
で遅い夕食をとる。維西は海拔2180m。3000m以
下に来ないとアルコールに手をつけない、という
自己規制の枠が外れたので、久しぶりにビールで
乾盃。陸さんは好きなだけ料理を注文する。食文
化の面から言えば、チベット圏は単調で簡素であ
る。が、ここ維西は温帯から亜熱帯にいたる雲南
の少数民族のエスニック料理の多様性を味わえる
地域に入る。巡礼中の粗食にうんざりしていたの
で、出される料理が余計そう感じられたのかもし
れないが、家庭のお総菜的なメニューの1つひと
つが美味しかった。豚のあばら肉を骨つきのまま
小さく切って油通した立田揚風のもの。実に味
が良い。豚の耳のスライス。レバーとねぎの炒め。
ジャガイモの千切りの炒め。豆腐と白菜のスープ。
加えて、維西の豆腐の味は定評があるとのことな
ので、湯豆腐を特注する。そしてハイライトはコ
ンニャクを唐辛子で炒めたもの。それぞれ味付け
が良かった。

翌日、10月20日も快晴。横断山脈への旅は雨期
が完全に明ける10月中旬以降が良いだろう。維西
を早発ちして3180mのメコン・金沙江分水嶺を越
えて金沙江沿い下る。長征（ロング・マーチ）
緑の土地、^{シグ}石鼓と金沙江の流れが南から北に反転
して大きく屈曲する長江第一湾を過ぎれば麗江は
もうすぐである。午後3時前に麗江着。流石運転
手の扎西さんは妻子ある身ながらプレーボーイで
ある。前夜維西から電話をしておいたらしく、納
西族の娘さんが迎えに来ていた。

地域ニュース

《中国》

ダライ・ラマ14世訪台、李総統と会見

チベットの精神的指導者、ダライ・ラマ14世が3月22日～27日の6日間、台湾を訪問した。亡命政府の事務所設置を要請し、李登輝総統とも会見、各地での講演には延べ10万人以上の聴衆が集まり、一挙一動が市民の関心を集めた。台湾との友好をてこに中国との対話促進を狙うチベットと、チベットの主権を事実上放棄し、「和解」を演出した台湾。しかし、チベットと台湾独立派の結束を警戒する中国の厳しい出方も予想され、微妙な「三角関係」の下で、この友好関係を保てるかどうかは未知数である。(朝日新聞)

ウイグルで地震、9人死亡

中国北西部の新疆ウイグル自治区伽師県で11日午後1時34分(日本時間同2時34分)、マグニチュード(M)6.6の大きな地震があり、同県の当局者が電話で明らかにしたところによると、少なくとも9人が死亡、39人が負傷した。今年に入って同県でM6以上の地震が起きたのは6回目で、計70人以上が死亡した。(1997.4.11 北京共同)

《インド》

バス乗り場で爆弾が爆発、16人が死亡

インドのUN I通信によると、3月29日夕、ジャム・カシミール州ジャムのバス乗り場で、2発の爆弾が爆発し、少なくとも16人が死亡し、約60人が負傷した。

ニューデリーでは3月28日から、カシミールの帰属などで対立するインドとパキスタンの外務次官協議が3年ぶりに開かれている。

(1997.3.30 東京新聞)

印パ外相が会談、抑留者交換で合意

非同盟諸国会議の外相会議を機にニューデリー

入りしているパキスタンのアユブ・カーン外相は4月9日、インドのグジュラル外相と会談した。インドとパキスタンは、カシミール問題をめぐって関係が悪化した1989年を最後に外相の公式会談は途絶えており、今回が8年振り。3月末には3年余り途切れていた外務次官協議も復活している。

会談で両外相は、5月14日に開かれる南アジア地域協力連合の首脳会議を機に印パ首相が会談することを確認、その前にイスラマバードで外務次官協議を開くことを決めた。両国の首相会談が実現すれば9年振りとなるが、両外相会談後の4月12日インドのゴウダ内閣が総辞職すると云う政変があり、両国の対話が微妙な影響を受けることは避けられない。仮に国民会議派主体の新政権が成立した場合、伝統的にパキスタンに対してタカ派姿勢で臨んできた同党が柔軟な対パキスタン姿勢を継続できるか疑問視する見方も出ている。

この日の会談では、懸案のカシミール問題について踏み込んだやりとりは避けた模様だが、両国が抑留している漁民の交換で合意するなど、緊張緩和の兆しをのぞかせた。

両国は英国からの分離独立以来、イスラム教徒の多いカシミール地方の帰属をめぐってともに領有権を主張して譲らず、1949年と1965年の2回、印パ戦争が起きた他、1971年のバングラデシュがパキスタンから独立する時にも戦った。

1989年にはカシミールをめぐって印パ間は一触即発の事態にまでなり、核戦争の危険性が高まっている、と懸念されたほどだった。(朝日新聞)

ゴウダ政権崩壊、グジュラル政権発足

ゴウダ政権がわずか10ヶ月で崩壊したのを受けて、中道左派の13政党からなる与党連合「統一戦線」の議長となったインデル・クマール・グジュラル氏が首相の座に着いた。しかし、新首相の選出をめぐって与党連合内に亀裂が生じ、有力な地方政党が閣僚を送らず、閣外支援にとどまっている。表面上は、政治危機はひとまず回避されたが、統一戦線の足並みが乱れており、新たな不安材料でもある。

なお、グジュラル新首相は当面、外相と蔵相を

兼任する。閣僚は、4人を除き、ゴウダ前内閣の閣僚が全員留任した。

同首相はインディラ・ガンジー政権までは国民会議派に属していたが、その後、中道左派のジャナタ・ダル（人民の党：インド人民党とは異なる）に転じた。（朝日新聞）

インフォメーション

「白き氷河の果てに」再上映

1977年日本K2登山隊の記録映画「白き氷河の果てに」の再上映が行なわれる。20年前のカラーフィルム登山の様子を知る上で一見の価値がある。

日時 1977年6月6日（金）

18時30分開場 19時開演

場所 横浜市教育文化ホール

JR関内駅南口（大船寄り）1分

〒231 横浜市中区万代町1-1

教育文化センター2F

TEL 045-671-3717

主催 神奈川ヒマラヤ登山隊1997

事務局担当 広島三朗

TEL（昼）0427-42-6111 相模台工高

（夜）0466-43-0178

入場整理券は千円。横浜市内及び周辺の有隣堂各店、IBS石井スポーツ、カモシカスポーツ山の店横浜店などで販売している。

中国の55民族の芸能記録テープを発売

日本ビクターが4月10日に中国の少数民族の伝統芸能を収録したビデオ「天地楽舞」（22巻）を発売した。

既に発売した1期分の18巻と合わせて、中国政府に公認されている56民族のうち、漢民族を除く55民族全てをカバーすることになる。今回発売の中には、豊作を祈るミャオ族の「芦笙舞」やトン族の「村の訪問客を歓迎する道ふさぎ歌」など、創世神話、結婚式、シャーマンの儀礼、新年行事が収録されている。日中合作。27万円。

漢語短期スクール実施

（社）日中協会では、中国国家教育委員会並びに中国大使館教育処の協力の下、短期語学留学参加者を募集している。1980年夏に初開催し、今年は第18期目となる。実施予定校は北京語言文化大学、北京大学、中国人民大学、上海復旦大学。

参加資格は、健康な60才以下（北京大学は55才以下）の中国語を学習している学生及び一般社会人で、中国の法律・学校の規則を遵守する者。なお、60才以上の希望者は、別途連絡のこと。

登録締切日や費用、日程などは各大学により異なるので、詳細は下記に問い合わせのこと。

問い合わせ先 社団法人 日中協会（担当：小淵）
〒121 東京都文京区後楽1-5-3

日中友好会館本館3F

TEL 03-3812-1683（代）

FAX 03-3812-1694

平日10：00～18：00 土日は休み

トピックス

ヒマラヤもかすむカトマンズの街 大気浄化へ電気三輪車走る

ネパールの首都カトマンズは、増える車で大気汚染が深刻だ。ヒマラヤの山々も見えにくくなった。こうした中でネパール人技術者らが欧米の援助団体の支援を受けてバッテリーで走る電気三輪車を開発し、昨年より17台が市内で運行を始めた。乗り心地も上々で電気の豊富な山国の環境浄化と省資源の旗手として注目を集めている。

これまでカトマンズの大気を汚染する車の中でとりわけ悪評高かった車は「テンポ」と呼ばれるインド製中古の三輪自動車だった。新しく走り出した電気三輪車は「テンポ」と同じデザインで、愛称は「サファ・テンポ（きれいなテンポ）」。

車体のシャーシなど一部はインドから輸入しているものの、大半はネパール製、今年末には約100台の電気三輪車が走る見込みだと云う。

（朝日新聞）

ヒマラヤから

クーラ・カンリⅡ便り

你好、3月25日 CA926便にて北京17時30分(現地時間)着。張江援交流部長、趙建軍、趙連友両交流部副部長等CMAの面々に迎えられてそのまま韓国料理店で歓迎会。顔副主席、営道水交流部長も出席。21時過ぎに前門飯店に到着。飯店には曾曙生主席と李致新副主席が待っていてくれ、30分ほど主に北朝鮮の件について話しました。その後北朝鮮オリンピック委員会の2人(北朝鮮に登山協会を作る責任者)と30分意見交換を行いました。これらは全て現在は行政部の李豪偉の取計らいです。

3月26日 北京発8時49分。雨上りの成都には11時13分着。昔懐かしい王華山氏が出迎えてくれ、昼食後ラサ大酒店に投宿。夜は四川省登山協会秘書長の羅さんの招宴で健康火鍋に舌鼓を打ちました。

3月27日 成都発6時52分。ニエンチェンタンラ山脈東部の山々がびっしりと雪をつけて、素晴らしい景観でした。ラサ着8時32分。成天亮氏と今回のチベット側隊長：多吉甫氏それに通訳の崔雄氏が出迎えてくれました。11時にヒマラヤ・ホテルに投宿後、本日は休養とします。

3月28日 室内温度10℃、暖房は無しです。10時にTMAへ行くも、例によって「鍵屋さん」がおらず出直し。14時から16時20分まで寝袋干しやデボ品のチェックをしました。今ラサは7時30分には明るくなり、日が暮れるのは20時30分頃です。

3月29日 10時から梱包作業を行ない、11時過ぎには全て終了しました。夜は「壮行会」が開催され、18時10分～20時30分の大宴会となり、TVや新聞の取材陣もかけつけました。

3月30日 午前中休養。午後は山森を除く6人は裏山の4100mまで順応訓練に行きました。

3月31日 午前は山森を除きポタラ宮見学と野菜類の買い出し。午後は昨日と同じルートを4250mまで順応し、16時50分からトラックに積み込みを行ないました。

4月1日 9時30分、盛大な見送りを受けてジープ3台トラック1台でラサを出発。4700mの峠からヤムドクツォ越えに、サマー・キャンプの舞台であるニンチンカンサを眺め、浪^{ランカズ}子で昼食。5200mの峠から目標のクーラ・カンリと1986年HAJが初登頂したカルジャン(7216m)の雄姿をブマヨツォ越えに見て感激しました。2つの湖は共に結氷していました。しかし、この頃から北京ジープの状況が悪くなり、徐々に離ればなれになり、我々のジープは彷徨い、23時モンダ上流の宿舎に着きました。

4月2日 ドジブ隊長の案により、BCはここから4～5時間歩いた所にヤク輸送で明日建設予定となりました。ルートは予定通りⅡ・Ⅲ間をとります。現在10時、良く晴れて眼前にはクーラ・カンリ、カルジャン、ガンシャーラムなどが見えています。再見 (4月2日BCより山森)

チベット側陣容

隊長	多吉甫 ^{ドジブ}	57才	'85	チョー・オユー	登頂
登攀隊長	嘎 ^ガ 亜 ^ヤ	37才		チョモランマ	登頂
登攀隊員	加措 ^{ジャツォ}	34才		"	"
"	小齐米 ^{シヤオチミ}	41才			
"	多布傑 ^{ドブシェ}	41才			
通訳	崔雄	29才			
コック	李世民	37才			

Books

ストック・カンリーTMA'96登山報告書ー

96年8月、同協会の30周年主要記念行事として行われたインド・ヒマラヤ・ジャム&カシミール州のストック・カンリ(6153m)全員登頂報告書。

第Ⅰ部・隊員の活動、第Ⅱ部・各担当の記録、第Ⅲ部・遠征日誌、第Ⅳ部・鳥取大学医学部の特別寄稿「低圧室での高所順化を担当して」、第Ⅴ部・隊員随想、の編成となっており、各係の具体的なアドヴァイスや反省事項は、次に続く登山隊の参考になる。また、県山岳協会隊と云う性格上県内各地からの隊員公募となり、その為に派生する事務局の諸々の苦勞が窺われる。

B5版・カラー4ページを含む92ページ。

問い合わせ先:

〒689-41 西伯郡岸本町岸本951-100

大西一俊方 ☎0859-68-3425

ヤを目指そうとする隊には大いに参考になる。

A 4 版・カラー10ページを含む102ページ。

送料別領価2,500円。

申し込み先: 〒320 宇都宮市戸祭町2145-10

田澤 孝方 ☎028-621-3663

さらなる山をめざして-KR4峰遠征報告書-

96年8月、同会の30周年記念行事として行われたインド・ヒマラヤ(ウツタル・プラデシュ州)のKR4(6340m)登頂報告並びに学術調査報告書。

本遠征実現のきっかけは、毛塚典子隊員の酒席での一言だったと云うが、気心の知れた仲間達と『やりたいこと』を『やる機会』と『やれる環境』を築き、実現に漕ぎ着けた充実感と喜びが伝わって来る報告書である。

詳細な各係の報告は、これからインド・ヒマラ

東京集会のお知らせ

日時 5月26日(月)午後7時~

内容 クーラ・カンリII隊仮報告&帰国祝

場所 HAJルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

原稿募集

紀行 遠征、トレッキング、旅 etc.....

ヒマラヤ及び高地アジアに関する地域なら何でも結構です。“記録”だけではなく“紀行”としてお気軽に御投稿下さい。400字詰原稿用紙6~8枚程度、写真3~5枚、横書きをお願いします。

またヒマラヤ地域へ出かけられる方、計画書をご送付下さい。各方面からの問い合わせ用に使用します。

★ 投稿は会員、非会員を問いません、採用分には掲載誌とテレホンカードを贈呈致します。

★ 送り先 〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7 萬栄ビル501号

日本ヒマラヤ協会機関誌編集部 TEL 03 (3988) 8474 FAX 03 (3988) 8502

東京新聞の本

山の情報誌 岳人



毎月15日発売(日・祝日の場合は前日) 定価670円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は通常号116円、特大号124円です。年間購読料は8,480円で送料は当社負担です。お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

97年	第1特集	特別企画
★1月号	日本の雪山大作戦	南米インカ・トレイルを行く
2月号	富士見十三州の山	春のフンザとバルトロ氷河
★3月号	山スキー大滑降	ネパールの夢のトレッキング
4月号	アルプスの雪鏡	初夏のロッキー特選コース
★5月号	花と森の山旅	中部の山岳会と奥美濃の山
★6月号	私の花の名山	創刊50年 世界のアルピニストたち
★7月号	今から間に合う海外の山	仙台のクラブ、東北の沢を行く
8月号	みちのくの山と沢	屋久島の緑深い峰々と人
9月号	修験の山は名山	山の達人と訪ねる秋の北海道
★10月号	紅葉の山、尾瀬と南会津	撮影クラブと秋の大峰山脈へ
11月号	晩秋、湯けむり紀行	フリークライミング天国・岡山
12月号	身を守る雪山技術	冬の奥秩父に生きる山人たち

(★は 特大号となります)

東京新聞出版局 (中日新聞 東京本社) 〒108 東京都港区港南2-3-13 ☎(03)3740-2674
書店で発売中。中日新聞販売店でも取りつぎます。

パキスタン登山隊1996年結果一覧

パキスタン観光省によると、1996年の登山隊申請数は78隊に及び、63隊が登山許可を取得、内7隊が何らかの理由によりキャンセルしている為、登山隊実数は56隊となった。

14ヶ国409人の登山者がパキスタンを訪れたが、その国別の内訳は、日本が最多で13隊71人、次いでイタリア7隊65人、スペイン5隊35人、イギリス(31人)・韓国(29人)・U.S.A(27人)が各5隊、フランス4隊27人、オーストリア3隊27人、ポーランド(16人)・ドイツ(6人)・パキスタン(55人)が各2隊、チリ(9人)・ニュージーランド(6人)・ルーマニア(5人)が各1隊となっている。

八千メートル峰の人気は依然として衰えず、56隊中28隊が八千メートル峰30座を目指し、11隊が13座に登頂した。また、八千メートル未満の山を目指した28隊中12隊が登頂に成功している。然しながら、今年もポーター3名を含む14名の犠牲者がでた。その他にも、高山病や凍傷などのために救援ヘリコプターのお世話になった登山者が幾多いる。

登山料収益は40万1,900ドルに及び、登山隊に雇用されたローカルポーター総数は約4,500人、連絡官56人、ガイド・コック・高所ポーターの合計数は120人となっている。また、装備や食料などの残値や放置のペナルティーを受けた登山隊は10隊、追徴金総計は2,450ドルとなった。

山名	標高	国別	隊長名	人数	成否	期間	備考
マッシュャーブルム	7,821	U.S.A	Peter Cole	4	×	5/12~	
ガッシュャーブルム II	8,035	U.S.A	R.F.Wilcox Jr.	7	×	5/ 5~	
ハラモシュ	7,409	韓国	Byoung Seak Kim	7	×	5/16~	
K 2	8,611	F.O.S	戸高雅史	2	○	5/19~	単独無酸素
ムスターグ・タワー	7,273	U.S.A	Adrian Burgess	4	×	5/22~	
ガッシュャーブルム I	8,068	イギリス	M.G.Leg Bridges	12	○	5/25~	
ブロード・ピーク	8,051	韓国	Hong Jong Pyo	7	○	5/26~	隊員3名HAP1名死亡
K 2 ブロード・ピーク	8,611 8,051	チリ 同上	Rodorigo Jordan 同上	9	○ ○	5/30~	
ウルタル II	7,388	カトマンズクラブ	高橋 堅	5	○	5/30~	全員登頂
ガッシュャーブルム II	8,035	U.S.A	Richerd Celsi	6	○	6/ 3~	
K 2	8,611	JAC青年部	山本 篤	19	○	6/ 3~	12名登頂
ガッシュャーブルム II	8,035	イタリア	Ha Chan Soo	19	○	6/ 9~	
ガッシュャーブルム II ガッシュャーブルム I	8,035 8,068	スペイン 同上	Jose Callau Garcia 同上	15	○ ○	6/ 9~	登頂後1名死亡
ガッシュャーブルム I	8,068	ネパライマーズクラブ	林 雅樹	3	○	6/ 9~	全員登頂
ウルタル II	7,388	JAC東海支部	山崎彰人	2	◎	6/ 9~	ポーター1名死亡、全員登頂後隊長死亡
トランゴネームレスタワー	6,239	山岳同人B.S.R	篠原達郎	3	○	6/13~	全員登頂
ガッシュャーブルム I	8,068	フランス	Erancois Daniel	5	×	6/11~	
ガッシュャーブルム I	8,068	スペイン	Eneko Garcia	4	×	6/13~	
ガッシュャーブルム IV	7,925	韓国	Gye Nam Lee	7	×	6/15~	
K 2	8,611	イタリア	Negri Marco	15	○	6/ 3~	登頂後1名死亡
ナンガ・バルバット	8,125	ルーマニア	Petcu Razvan	5	×	5/16~	雪崩で2名死亡
キンヤン・キッシュ	7,852	同人バハール	飛田和夫	6	×	6/17~	
ガッシュャーブルム I	8,068	オーストリア	Studer Wilfried	4	○	6/20~	ポーター1名死亡

山名	標高	国別	隊長名	人数	成否	期間	備考
K 2	8,611	ドイツ国際隊	Falk Liebstein	4	×	6/24~	
トランゴタワー	6,239	韓国	Mun Jong Kuk	3	○	6/24~	
ブロード・ピーク	8,051	イタリア	Ramon Lasa	6	×	6/30~	
ブロード・ピーク	8,051	イタリア国際隊	Francesco Galperti	8	×	6/30~	
ディラン	7,357	スペイン国際隊	Jose Ruiz Andujar	5	×	7/ 2~	
ナンガ・バルバット	8,125	イタリア	V.Roberta(Miss)	5	×	7/ 5~	
ブロード・ピーク	8,051	イタリア	C. Francesco	6	×	7/ 7~	
ディラン	7,357	山梨岳連	青木 茂	12	×	7/ 8~	
ラトック I	7,285	イギリス	Andy Macnae	9	×	7/ 9~	
マッシュャーブルム	7,821	U.S.A/ロシア	Lev B.Ioffe	6	×	7/10~	
ブロード・ピーク	8,051	江北山の会	細田一郎	1	×	7/11~	
ブロード・ピーク	8,051	ポーランド国際隊	Jacek Berbeka	11	×	7/11~	
K 2	8,611	イギリス国際隊	Harry Taylor	6	×	7/11~	
ティリッチ・ミール W	7,487	スペイン	F.J.Llongueres	5	×	7/14~	
ティリッチ・ミール M	7,706	スペイン	Carlos Soria Fontan	6	×	7/15~	
バインダー・ブラック	7,285	神奈川高体連	永澤 茂	6	×	7/15~	
ライラ	6,614	イタリア	Oreste Forno	6	○	6/19~	
ガッシュャーブルム II	8,035	フランス	Bernard Mudry	9	×	7/20~	
スパンティーク	7,027	オーストリア	Peter Worgotter	12	○	7/29~	
スパンティーク	7,027	フランス	P.Allibert	7	×	7/29~	
シャカウル	7,084	ドイツ	Fendt Alfred	2	○	8/ 1~	
イストル・オ・ナール	7,403	オーストリア	Roland Maruna	11	○	8/ 2~	
ウルタル II	7,388	韓国/パキスタン	Seo Ki Seok	5	×	8/25~	
ナンガ・バルバット	8,125	墨田山の会	倉橋秀都	3	×	6/ 9~	
ディラン	7,357	バーリアンクラブ	岩崎 洋	2	○	7/ 4~	全員登頂
ティリッチ・ミール M	7,706	フランス	P.Bouchard	6	○	7/ 2~	
パスー	7,284	パキスタン山岳会	Col.M.Hussain	50	○	6/20~	プレ50周年記念登山
デスタギール・サール	7,760	ニュージーランド	R.S.W.Thornley	6	×	6/29~	隊長と隊員2名死亡
マッシュャーブルム	7,821	パキスタン陸軍	Maj.A.J.Bhatti	11	○	6/27~	
マクロン・チッシュ	6,607	イギリス	Simon A. Yates	2	×	8/ 7~	
ウルタル II	7,388	ウータンクラブ	長谷川昌美	5	×	8/25~	
ナンガ・バルバット	8,125	イギリス	Anthony V.Saunders				冬期
ナンガ・バルバット	8,125	ポーランド	Andrzej Zawada				冬期

◎初登頂 ○登頂 ×失敗

《資料提供：日本ヒンドゥークシュ・カラコルム研究会 シルクロード・ツアーサービス》

※山と溪谷No.736（'96年11月号）ヤマケイジャーナルニュース欄のポーランドのクシストフ・ヴィエリツキのナンガ・バルバット登頂については、不明。

リエゾン・オフィサー及びネパール人雇用人

ーリエゾン・オフィサー (L. O.)ー

リエゾン・オフィサーは観光省より任命され、登山期間中、隊に同行する事となる。回数を重ねた慣れたリエゾンになるとBCまで行かず、麓の町に滞在し登山隊を待つ者や、ひどいのはカトマンズから動かない者までいる。又、高山病に罹り下山してしまうケースも多い。しかし万が一の事故などトラブルの起きた場合など、諸手続きに必要なため、リエゾンが隊から離れる様な場合は必ず連絡の取れる様に打合わせておく必要がある。

又、キャラバン中もほとんど荷物は担がないので、ポーターの手配もお忘れなく。

規則ではリエゾンには装備を支給する事となっている。これは隊員と同レベルのもので新品と規定されている。しかし現在、現物を支給する隊は殆どなく、現金で支払う形を取っている。リエゾンも現金の方を希望している。その際、現物を支給したという書類を作成し現金を支払いという形となる。尚、そのシーズンの最初の隊が相場となる。又、冬のシーズンは多少割り高となる。

現金で支払った場合はキャラバン中やBCで使用、合羽、防寒着、寝袋などの装備類のチェックは必要である。

遠征期間中の給料を登山隊が支払う事となるが金額は装備代同様交渉となる。

ーネパール人雇用人ー

いわゆるシェルパと総称されているネパール雇用人だが、ネパールヒマラヤ登山の古い歴史と伝統が引き継がれ、ヒマラヤ登山の多種の分野に渡って優秀である。元々高所に住むシェルパ族が活躍していたが、最近ではその他の民族も少なくない。

ネパールの登山では一般的に、サーター(ヘッドマン)、H.A.P. (High Alutitude Porter) コック、キッチンボーイ、メイルランナーなどを雇用する事となる。規則からだサーター、メイルランナーは必ず雇わなくてはならない。しかし慣習で各仕事の分担はしっかりと分かれているので、規則通りの雇用という風にはいかないであろう。

しかし、小人数の隊や、登山活動自体はシェルパレスで行うのであれば、サーター兼コックみたいな兼業などの方法もある。

尚、登山隊で雇用するローカル・ポーターを除く雇用人はネパール山岳協会(NMA)に登録されていないといけない。

又、ネパール人雇用人の働きが不満足な場合は登山隊長はLOと相談の上これを解雇することができる。

規則ではLO同様支給装備、サラリーの額は定められているが、物価の上昇や規則が古い事などから規則通りの支給、支払にはなっていない。やはり装備も支給より現金の方を希望する事が多い。しかしその場合はサーター、HAPなどの装備は事前にチェックが必要。

ー各スタッフの装備代及び日当ー

(コスモトレックの場合、飽くまでも参考です)

	支給装備代金	日当
L.O.	1000~1500 \$	5 \$
サーター	1000~1200 \$	5 \$
HAP	1000~1200 \$	4 \$
コック	850~1000 \$	4 \$
キッチンボーイ	800~1000 \$	3 \$
メイルランナー	800~1000 \$	3 \$
〈規則によって定められたLO、ネパール人雇用人の支給装備〉		
シュラフ (低所用)		1
” (BC用)		1
毛のズボン又はニッカ		2
毛の靴下		4足
トレッキング・シューズ		1足
ゲーター (スパッツ)		1
羽毛服		1
防風衣		1
” ズボン		1
羽毛ズボン		1
セーター		1
毛のシャツ		2
毛の帽子		1
エアーマット又はラバーベット		1

毛の手袋	1
リックサック	1
スノーゴーグル	1
傘又は雨具	1
スノー・ブーツ	1足
遠征期間中のテント	1張
ピッケル（L Oは除く）	1

登山に必要なその他の装備

食料、薬品及び医療も受けることができる。

それでは各仕事の役割について記してみよう。

ーサダーー

ヘッドマン、マウンテンガイドなどと呼ばれていたが、現在サダーが一般的な呼称。いわゆるネパール人スタッフの頭で隊全体をサポートする。又、登山中の荷上げ、ルート工作なども行う。

ーH.A.P.ー

ハイポーターとして登山活動中の荷上げに従事する。キャラバン中の隊荷を運ぶのはローカル・ポーターの仕事となる。

尚、規則によって高所におけるポーターの荷物は下記重量を超えてはならない。

a. 5000m～6000m	20kg
b. 6001m～7000m	17kg
c. 7001m～8000m	14kg
d. 8001m～	12kg

ーコック、キッチンボーイー

隊の食事を作るスタッフで、コックの地位は高い。長く日本隊に付いているコックなどは日本人好みの味の料理を作るベテランも多い。キッチンボーイの仕事は、コックのアシスタント的な仕事となる。コックは水汲みなどのキッチン関係の雑用は行わない。キッチンボーイの人数は隊員の他L.O.、ネパール人スタッフを含めた総人数で、5人に1人が平均となる。しかしこれも目安なので、隊の判断、交渉次第となる。

ーメールランナーー

登山隊は規則で登山中のウィークリー・レポートを提出しなくてはいけない。そのため、それを配送するためメールランナーの雇用が義務づけられている。その他、隊の手紙を運んだり、帰路キャラバンのためのポーター集めなどの役割が仕事となる。

保 険

規則によって登山隊は事故に備え、L O、サダー、H A P、B C 要員に対して規定の事故保険を付保することとなっている。ローカルポーター（L P）に関しては強制されない。付保されるべき者が、中途雇用あるいは他の理由により、無保険で事故に遭遇し死亡または負傷した場合、登山隊は死亡者の相続人あるいは負傷者本人に対し、保険額相当の補償金を支払わねばならない。

無保険のL Pが死亡または負傷した場合も、前記同様の補償金を支払わねばならない。尚、事故には、雪及び高度に関わる病気も含む。雇用中とは、契約時より契約地帰着日までの期間である。

ー補償金額ー

L O	200,000Rs
サダー	150,000Rs
H A P	100,000Rs
B C 要員	55,000Rs
ローカルポーター	50,000Rs

以前、ある大学の登山隊によるシェルパの死亡事故の際、年1000\$×10年間の支払い、といった補償を行った。そして昨年、ある隊でシェルパの事故の際、前記の隊と同じ補償を要求されるということがあった。無論、このような事故の際は精一杯の補償を考えたいと思うが、やはり規則に準じたある程度のその国の相場に基づいて補償をやっていくべきだと思う。

又、上記の補償金額も物価の上昇などから多少アップされている。保険金額は支払額の1%が掛け金となり、補償期間は手続き日より三か月が有効となる。エージェントによってはそこからさらに手数料を差し引いている場合もあるため、チェックが必要である。

保険会社は、国営保険会社および観光省認可の保険会社を使用する事と規則によって定められている。

ローカルポーターの保険は、保険会社の規則により最低人数は20人と決められておる。ゾッキョ、ヤク等には適用されない。

尚、出発前に、L O及び雇用するネパール人スタッフの健康診断書の指示を義務付けておくとよ

いだろう。

無線機

ネパールの場合ウォークー・トーキー及びトランシーバーを使用する場合、使用許可書、輸入許可書を必要とする。

前回入国時のカスタムでの手続きについて記してみたが、カスタムに預けた登山隊は、入国後下記の申請を行い、使用許可書、輸入許可書を交付した後クリアランスする事となる。

登山隊1隊につきウォークー・トーキー10台、トランシーバー3セットまでが使用可能となる。

出力は500Wまで、周波数は26,968MHz～26,972MHz、144MHz～145MHzまでが使用可能となる。まず日本にて使用する無線機が許可取得が可能か、あらかじめ使用機種のカatalog（英文がベター）をエージェントに送付し、情報省へ事前に問い合わせてもらほうが良い。一般的に使用している無線機なら問題なくクリアーできるはずであるが、特殊な無線機、電話機などはあらかじめ調査が必要である。

情報省には、使用許可書取得手数料として1台につき最低30\$の外貨を支払う。

商業省には輸入許可取得手数料として1台につき日本での購入価格（定価）の13.5%支払う。

ウォークー・トーキー等はベース・キャンプより上部のみ使用可能である。

持ち込む際、無線機は手続きに時間が掛かるのでバラバラに持ち込まず、一度にまとめて持ち込む事を薦める。

又、日本からの別送品の中に入れると荷物のクリアランスに時間が掛かってしまうため、必ず手荷物として持参するようにしたい。

尚、無線機は登山終了後に必ず持ち帰らなければならない。

ブリーフィング

登山隊は諸手続き終了後、キャラバン出発前に観光省のブリーフィングを受けなくてはいけない。

ブリーフィングには登山隊長、サード、リエゾン・オフィサーが出席する事となる。

原則的にはブリーフィングの日程決定後にリエ

ゾン・オフィサーの指名が観光省からある。

ブリーフィング時の質問内容一

1. 登山する山の名前、標高
2. 登山ルート
3. 登山隊の名称
4. 隊員数
5. 隊長名
6. リエゾン・オフィサー名
7. サード名
8. HAPの人数
9. BCワーカーの人数
10. ローカル・ポーターの人数（往復）
11. バイオデータ
リエゾン・オフィサー
サード
HAP
12. 酸素の使用
13. ウォークー・トーキーの使用について
14. ラジオ・セット
15. レスキュー体制
16. エージェント
17. 契約書
18. 高所キャンプ数や位置
19. BCの標高
20. 登山料
21. ゴミ処理のデポジットマネー
22. 石油・ガスの量
23. 保険
24. 登山期間（カトマンズ～カトマンズ）
25. 登山期間（登山活動）
26. カトマンズ出発日
27. リエゾン・オフィサーの健康診断書
28. 推薦状
29. キャラバンルート
30. その他

以上の様な項目について英語による質問がある。

（文責 野沢井 歩）

ムスターグ・アタ (7,546m) 登山計画

趣 旨

日本ヒマラヤ協会は、ヒマラヤの愛好者で構成する全国組織の任意団体であります。本会は創立以来29年間に、ヒマラヤ諸国(7ヶ国)に80数隊の登山、踏査隊を派遣し、その成果を公表することによってヒマラヤ登山の大衆化に寄与すると共に、ヒマラヤ諸国との親善交流に努めて参りました。

日本のヒマラヤ登山は、1964年の外貨の自由化を機に社会人の進出が目立つようになりました。70年代には未知と困難を求めて多くの岳人がヒマラヤを目指し成果をあげましたが、これらが一段落した80年代に入ると一気に二極化(先鋭登山と大衆化)が進み、90年代になると一極化と錯誤するほどの大衆化が進んでおります。

このような我国のヒマラヤ登山の推移の中にあつて、女性だけによるヒマラヤ登山隊も組織され、1974年には世界初の八千メートル峰のマナスルの登頂成功、75年には世界初のエヴェレスト登頂にも成功しました。その後も女性隊は88年ガッシャーブルムⅡ峰、90年ダウラギリⅠ峰など登頂に成功しております。これらの登山隊は、目標が八千メートル峰であることから、日本全国から有志が集まって組織されました。

海外登山の大衆化が進む中で、このほど北海道の女性が海外の山々へ目を向け、憧れを実現するために同人を組織したことは、本会がこれまで活動してきたことの一つであるヒマラヤの大衆化に、通じることでもあります。

7500mという大きな山を目標としたこのたびの登山隊を、同人ラリーグラスの要請を受け入れて本会主催と決定したのは、市川隊長が本会派遣の女性登山隊5隊の内3隊に参加した実績と信頼関係のためでした。

組織は、大きくても小さくても基本は変わりません。同人ラリーグラスに集まった皆さんが、それぞれが異なる土壌で育んできた経験を認め合い、目的を達成するために相手を思いやる〔優しさ〕を失わずに、市川隊長を中心に大きなヒマラヤを舞台にそれぞれが抱いた夢を実現させることを信じてやみません。

中国との協議、これまでのムスターグ・アタでの経験の伝達など、本会が全力をあげて推進致しますので、なにとぞ、関係の皆様のご支援・ご協力をお願い申し上げます。

1996年11月

日本ヒマラヤ協会

理事長 稲田 定重

ご挨拶

1996年4月、女性パーティで海外登山を行なうことを目的に、北海道内の多くの山岳会から意欲ある女性が集まり、同人ラリーグラスを結成いたしました。それ以来、私たちは多くの山行を重ね、研究をしてまいりましたが、この度、中国新疆ウイグル自治区、ムスターグ・アタ峰(7546m)へ、同人ラリーグラス最初の遠征隊を出すことを計画いたしました。ムスターグ・アタ峰は多くの登山隊に登られていますが、女性隊は初めてと思えます。女性だけでルートを開き、荷上げをする、大変なこととは思いますが意義が深いことだと思っております。

同人ラリーグラスは、まだ動き出したばかりですが、1993年から4回にわたりムスターグ・アタ峰に遠征隊を派遣している日本ヒマラヤ協会のご協力をいただき、日本ヒマラヤ協会隊として承認していただくことになりました。経験の深い日本ヒマラヤ協会から、多くのことを学びたいと思っております。

私たちは、自分たちのいろいろな力を出し合い、より充実した海外での山行を、和を大切にしながら、安全登山を心掛けて行なっていく所存です。そしてこの遠征が同人ラリーグラスの次のステップにつながるよう、実り多いものになりたいと思っております。

帰国後は、この貴重な経験で学んだことを、それぞれの職場や所属山岳会で役立てようと思っております。

なにとぞ、皆様のご支援、ご協力を賜りたく、お願い申し上げます。

1996年11月

日本ヒマラヤ協会

ムスターグ・アタ女性登山隊1997年

隊長 市川 春代

(同人ラリーグラス代表)

計画概要

1. 隊の名称

日本ヒマラヤ協会ムスターグ・アタ女性登山隊1997年

2. 目標の山

ムスターグ・アタ (慕士塔格7,546m)
中華人民共和国新疆ウイグル自治区

3. 目的

西稜からのムスターグ・アタ登頂
テイクイン、テイクアウトの実践

4. 派遣母体

日本ヒマラヤ協会 (H A J)

5. 隊の構成

隊長 市川春代

隊員 5名

連絡官 1名

通訳 1名

コック 1名

6. 推進の組織

日本ヒマラヤ協会ムスターグ・アタ女性登山隊実行委員会

会長 稲田定重 (H A J 理事長)

実行委員会: 山森欣一 (同 専務理事)

副実行委員長: 市川春代 (隊長)

事務局 長: 大内倫文 (H A J 理事)

実行委員: 八木原罔明、尾形好雄

寺沢玲子、中川裕、野沢井歩

(以上 H A J 常務理事)

石本明子 (同人ラリーグラス)

登山隊隊長

7. 登山事務局

日本ヒマラヤ協会

〒170 東京都豊島区東池袋 4-2-7

萬米ビル501号

TEL 03-3988-8474

FAX 03-3988-8502

(夜間) 山森欣一

〒134 東京都江戸川区臨海町 5-1-3-603

TEL 03-3680-2280

8. 留守本部

大内倫文

〒064 北海道札幌市中央区

9. 現地連絡先

中華人民共和国新疆维吾尔自治区喀什市体育路 8 号

喀什地区登山協会気付

TEL 86-998-2823680

FAX 86-998-2822957

10. 日程概要

7月15日(火) 千歳～成田 (飛行機)

16日(水) 成田～北京 (")

17日(木) 北京～ウルムチ (")

18日(金) ウルムチ～カシュガル (")



19日(土) カシュガル (登山準備)
 20日(日) カシュガル～ゲズ溪谷入口
 (バス)
 21日(月) ゲズ溪谷 (高所順応)
 22日(火) ゲズ溪谷入口～スバシ(バス)
 23日(水)～26日(土) スバシ(高所順応)
 27日(日) スバシ～BC
 28日(月) } 登山活動 (23日間)
 8月17日(日) }
 18日(月) BC (撤収準備)
 19日(火) BC～スバシ～カシュガル
 20日(水) カシュガル (隊荷整理)
 21日(木) カシュガル (観光)
 22日(金) カシュガル～ウルムチ (飛行機)
 23日(土) ウルムチ～北京 (")
 24日(日) 北京～成田～千歳 (")

隊 員 : 沢田幸子 (Sawada Sachiko)
 ① 1940.12. 生 (56歳)
 ② 〒170 東京都豊島区
 ③ 主婦
 ④ わらじの仲間
 ⑤ 1991 夏 インド、ヌン(7,135m)
 1992 冬 台湾、北大武山、太麻里溪(3,900m)登頂
 1993 夏 パキスタン、ブロード・ピーク(8,047m)
 1994 夏 中国、玉虚峰(5,933m)登頂
 1994 夏 パキスタン、ブルーダル・ピーク(5,300m)

隊 員 : 堰代まさ子 (Sekishiro Masako)
 ① 1945.7. 生 (52歳)
 ② 〒099-14 北海道常呂郡
 ③ (株) 旭組
 ④ 北見山岳会
 ⑤ 1988 冬 ネパール、ランタン・トレッキング(5,000m)
 1994 夏 中国、チョー・オユー(8,201m)

隊 員 : 狩野明美 (Karino Akemi)
 ① 1954.8. 生 (42歳)
 ② 〒070 北海道旭川市
 ③ 北海道厚生旭川病院栄養科
 ④ 旭川山岳会
 ⑤ 1990 春 マレーシア、キナバル山(4,200m)登頂
 1991 秋 パキスタン、パスー氷河(4,300m)
 1994 春 ネパール、ゴザインクンド(4,700m)縦走

隊 員 : 竹内千恵 (Takeuchi Chie)
 ① 1966.5. (31歳)
 ② 〒060-11 北海道北広島市
 ③ 第一高等学校
 ④ えぞ山岳会
 ⑤ 1992 冬 ネパール、ナヤカンガ(5,846m)
 1994 冬 ネパール、ランタン・リルン(7,243m)

11. 隊員

① 青年月日・年令 ② 住所・電話番号
 ③ 勤務先名・電話番号 ④ H A J、同人社
 ラリーグラス以外の所属山岳会

隊長 : 市川春代 (Ichikawa Haruyo)

① 1950.1. 生 (47歳)
 ② 〒053 北海道苫小牧市
 ③ 苫小牧市すみれ保育園
 ④ 美唄岳友会
 ⑤ 1985 夏 中国 八花氷山(5,850m)初登頂
 1987 夏 インド、ヌン(7,135m)
 1994 夏 中国、玉虚峰(5,933m)登頂

副隊長 : 辻野治子 (Tsuji no Haruko)

① 1956.12. 生 (40歳)
 ② 〒095 北海道士別市
 ③ (株) 秀岳荘旭川店
 ④ 室蘭岳友会、札幌登攀倶楽部
 ⑤ 1990 夏 ケニヤ、ケニヤ山(4,985m)登頂
 1994 夏 中国、玉虚峰(5,933m)登頂
 1995 夏 ヨーロッパ、モンブラン・ド・タ
 キュル(4,248m)他登頂
 1996 夏 パキスタン、ゴンドコロ氷河
 (4,200m)

■ 寸 感 ■

登山界もコンピューター時代。2ヶ月間事務局の留守を仰せつかったものの、諸詮機械音痴の身故、ネコの手にもなりはしない。哀れんだ岳友が覚えたら仕事が楽になるよ、と譲ってくれたラップトップ型のパソコンも、雑用に追われて触れるヒマもない。やはり私には手作業が一番サ、と己を慰める毎日である。しかし、こういう輩は徐々にその数を減じていくに違いない。幸いにも強力な助人の滅私奉公的尽力のお陰で、H A Jの事務仕事も少しづつだが機械化しており、近い将来名簿整理も数段楽にそして正確になるだろう。

反面、何か大切なものを失っていく様な寂しさを覚える。組織が組織として成り立っていくためには必要不可欠な過程である事は承知しているのだが…。きっと時代に乗り遅れていく吾が身に置き換えて観ているのかも知れない。

不慣れな手による本号と来号の機関誌の出来栄えは、押して知るべしである。平にご容赦を。哀れと思う会員諸氏は原稿の投稿を、そして年会費

の納入もお忘れなく。

(寺沢)

事務局日誌 (4月)

- 1日(火) 第三種監査資料提出
- 10日(木) ヒマラヤ306号発送
- 21日(月) 東京集会(11名)
- 25日(金) 湯浅道男氏還暦を祝う会(於KKRホテル:遠藤、八木原、尾形、中川、酒井、寺沢、)

ヒマラヤ No.307 (6月号)

平成9年5月10日印刷 9年6月1日発行

発行人 稲田 定重

編集人 山森 欣一

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7

萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



高山病対策の必需品

ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店 : 日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先 : 株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL : 03-5245-0511 FAX : 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遙かなる旅へ



個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク



キャラバンデスク TEL03-3237-8384

～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のパイオニア



株式会社 西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)1391(代表)

キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)8384(代表)

大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)

カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU. NEPAL ☎221707

運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店/〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブラーカ店/〒950 新潟県新潟市天神1-1ブラーカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メールオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004